The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	雑録の一節
Author(s)	仲田, 應弘
Citation	懐徳. 1956, 27, p. 67-68
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90300
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

雜錄の一節

仲田應弘

○

履軒先生の子柏園先生の妻が、柏というて、岸田清氏（泉北郡泉ケ丘町八田、代々庄屋、現戸主）の曾祖父の妹に當り、桐園先生の母に當る。明治三年十月二十七日七十八才で、泉町の中井家で亡くなられた。其の柏の女に千代といふのがあつて、岸田利作（後に利右衛門を襲名す）に嫁した。一男一女を生んだが、朝、洗顏に井戸端へいつて、足を滑らして溺死して了つた。寒泉翁が「去年來ましし其れを別れと白露の涕に沈む千代の玉の緒」と輓歌を作して、桐園先生に托したものである。沒年は明治二年四月二十七日であつた。千代の長男が岸田家を繼がず、泉北郡百舌村百濟（現、堺市百濟）辻尾氏の婿養子となつた楠司氏であつた。

楠司氏のいつた辻尾家は當地の豪農で、古くから岸田家とは婚を重ねてゐた楠司氏は特に農業の改良に熱心で、地方でも学典の樣に重きをなしてゐた。明治二十八年七月、京都市に農業博覽會があり、電車の通じなかつた時代だつたので、淀川を舟で京都へ上つたのであつた。京都の宿についてすぐ赤痢にかかり、その宿で、七月十一日、三十二歳で死んで了つた。長男は規矩彦氏（元大阪府社寺兵事課長）長女は、楠司氏の亡くなる三十日前に生れた「須賀」氏で、元代議士、井阪顯光氏の妻になつてゐる。

○

岸田家のことを知る爲に、同家の菩提寺である稱讃寺の過去帳を借りた處、「妙延」明治四未年十一月八日俗名宮口房治郎年貳歳、病氣、肝虫、初發五日より八日朝往生、醫師小坂村中田といふ死亡診斷書の寫しが記錄されてゐた。曾祖父、中田春玄が萬延二年に死んでから、祖父の六良平は、父業を繼いでゐたので、時に三十三歳の頃であつた。

○

七月十五日、河内長野市、吉年善作氏から「錦溪十五勝歌集全」を贈られた。明治二十七年八月三十日、先代善作氏（歌名正濟）が長野附近の景勝を、知友に詠んで貰つて輯錄した和本である。その中に、錦部郡西代村、松本明恕といふのがあり、これがかねがね知りたいと願つてゐた、外曾祖父、松本龍平の歌名であることが、吉年氏の御手紙に依つて知ることを得た。前略、西代の松本先生の御由、直ちに取調べ申候處、龍平先生の雅號を明恕と申されしと存候。私の父（正濟氏）等と歌友にて、中村良顯先生を師とせられし事思出し、短尺は不明に御座候へ共、其當時、當、長野町（舊錦部郡）の錦溪十五勝の歌集有之、其内に松本先生の歌も有之候に附、一部御贈り申上候間　云々

龍平の歌は此の集に七首採られてゐた。

天野山觀月

高殿にさし入る影のかしこくもむかしながらのつきを見るかな

瀧畑谷瀑布

秋のよの岩間をくぐる瀧つせのたまにきらめく月のかげ哉

諸越橋歸樵

ゆふけぶりたつをしをりに柴人の家路にいそぐ谷のかけ橋

正平陵寒樹

琴の音にひきかへてきく陵のまつ吹くかぜの今朝のしらべを

出詠者八十七名で、津守國美、渡邊春樹、高橋慶峯その他の諸氏であつた。

松本家は西代村の庄屋で、龍平は醫を業とし、その子、和計、文吾、貞曾三人共醫師で孫の龍平氏（圭右と改名）は、京都に出て醫業を繼いでゐる。龍平は四男の貞曾の手を引いて伴林光平の墓へ、よく參つたと、母から傳へきいてゐたが、書風に似た處がなく、光平の弟子の歌集には名を連ねてゐなかつた。

小生が歌道につ入たのは少年時代、母が毎日の樣に洗濯をしながら百人一種の歌を低唱してゐたことと、龍平翁がどの樣にして歌を作り短册を書いてゐた樣を聽いてゐたことなどであり、行儀については、いつも龍平翁の言葉をもち出しては、母は嚴格であつた。

○

泉ヶ丘町小阪了源寺に、中井竹山撰、加藤景範書、垣内節齋（久世大和守代官）の墓碑がある。